2022年9月3日(土) 11:00～
英米文化学会 第40回大会

準動詞に焦点を当てる学習活動による学生の英文理解に対する肯定的意識変化

東京薬科大学　平田 稔

研究発表内容

1. 研究の背景・動機
2. 研究の目的
3. 質問紙調査実施のための準動詞に焦点を当てる授業方法
4. 165回例会(2021/11)で提示した課題への本研究発表の対応
5. 質問紙調査の実施
6. 質問紙調査の結果
7. 質問紙調査の結果に関する考察

まとめ　今後の研究に向けて

参照文献・参考文献

1. 研究の背景･動機

発表者の大学、予備校、塾での英語指導経験から、英文法の中で特に準動詞と品詞･文型の理解が不十分であること、従って、学生への再指導が必要であることを痛切に感じてきた。理解が不十分であることを示す典型例が次の３つである。

① 文中のto不定詞が３つの用法のうち、どの用法で使われているかを正確に答えられない。

② 文中の動詞のing形が、動名詞か現在分詞のどちらか判別出来ない。

③ 文中の動詞形が、述語動詞の過去形か過去分詞形のどちらかを自信を持って答えられない。

➡ 学生が英語を曖昧に読んでいる証左である。

⇒ 準動詞のいくつは見かけ上は同一だが、品詞が異なることにより、文中での機能も異なるので、準動詞を十分に理解するためには品詞と文型の知識が必要不可欠。

⇒ 英語の基本である品詞と文型理解の重要性を学生に気づかせるために、３種の準動詞の語法解説を積極活用してみたらどうだろうか、という思い付きがこの研究の発端。

→ ハンドアウト「準動詞を品詞と機能の観点からとらえる」（資料２）の作成へつながる。

2. 研究の目的

準動詞全体に焦点を当てた授業を実施することにより、想定可能な次の３つの効果を検証すること。

① 動詞、名詞、形容詞、副詞の主要４品詞を同時に扱い、それらを一覧表にすることによって、各品詞自体の理解と、各品詞の文中での機能の理解の両方を深められる効果。

② 多くの学生が理解を疎かにして来たと思われる基本かつ重要な文法分野（品詞・文型・受動態）の理解が明確になり、基礎から英文の理解が促進される効果。

③ 英語で最も分かりにくく、最も重要なルールの一つである過去分詞の理解向上効果。(薬袋, 2000)

⇒ 品詞・文型・句(と節)・受動態の知識なしに準動詞理解は難しいという前提から効果を検証。

⇒ 準動詞全体を学習対象にすると、その理解のために必要な多くの基本文法分野を含めることになり、結果的に理解の相乗効果が期待できるのではないかという予想。

3. 質問紙調査のための準動詞に焦点を当てる授業方法

① **前期４回分**と**後期４回分**の授業を使い、毎回オリジナルのハンドアウト(A4で２～５ページ)を用いて**文法を解説**した。授業時間は50分で、毎回、授業の最後の５分程度で、Google Formを用いた５，６問程度の**クイズを実施**した。文法の全授業終了後、ハンドアウトの「準動詞機能分類一覧表」を参照しつつ、準動詞を品詞と機能の観点からまとめる2500字以上の日本語の**レポート課題**を課した。英語の例文は自作するように指示した。

② **後期５回目から15回目まで**の授業は、金星堂のテキスト *Good Health, Better Life* (2019)を使い、**Readingのパセッジを解説**した。テキスト中に準動詞がある場合、必ず用法を解説をした。また、毎回、授業の最後の５分程度でGoogle Formを用いた**クイズを出題**し、リーディングの内容を問う問題に加え、本文中の準動詞の用法を尋ねる問題を２問程度出題した。

授業回	授業内容	授業回	授業内容
前期1～11	音声学・フォニックス	後期１	不定詞
前期12	品詞	後期２	不定詞、動名詞
前期13	基本５文型	後期３	動名詞、分詞
前期14	句と節	後期４	分詞・分詞構文、準動詞のまとめ
前期15	受動態と第Ｖ文型	後期5～15	テキストを用いたReading

⇒ レポート作成課題へ

資料１-１ 準動詞のハンドアウトサンプル「不定詞」

不定詞［Infinitives］

Advanced Communication ②

不定詞、動名詞、分詞の３種を準動詞と呼ぶ。準動詞は動詞の機能にもう１つの品詞の機能がプラスされて文中で使われる。不定詞とは主語(人称・数)によって動詞の形が定まらない動詞形のことを言う。「定まらず」から「不定詞」という。動詞形が定まらないということは、同時に、常に動詞形が原形で一定しているという意味でもある。不定詞には「to 不定詞」と「原形不定詞」と２種類ある。to 不定詞は２語以上になるので、必ず句を形成する。

1.0　to 不定詞の３用法 … 名詞(的)用法、形容詞(的)用法、副詞(的)用法の３種類があり、それぞれの品詞の機能と動詞の機能を同時に兼ね備える。外見上、形は同一だが、品詞が異なるので文中の機能が全く異なる。

2.0 名詞(的)用法

動詞と名詞の機能を兼ね備える。名詞の機能を持つので、文中では主語、補語、目的語になり、必ず文の要素となる。前置詞の to があるので、前置詞の目的語にはなれない(この場合は動名詞を使う)。なお、wh- + to V(疑問詞＋to 不定詞)は、名詞的用法で名詞句を形成し、前置詞の目的語でも使うことが出来る。なお、名詞句は[　]で表示する。

2.1 主語(S)になる場合

[To see] is to believe.

S/v　V　C

「[見ることは]信じることである(諺：百聞は一見に如かず)」

[To learn a language] is to learn a culture.　To learn a language　to learn は名詞として S に、a language は learn の目的語になっている。これが品詞を兼ねるということ

S/v　o　V　C　　S/v　o

「[言語を学ぶことは]文化を学ぶことである」

資料１-２ 準動詞のハンドアウトサンプル「不定詞」

3.0 形容詞(的)用法

動詞と形容詞の機能を兼ね備える。形容詞の機能を備えるので、名詞の後に置いてその名詞を修飾する使い方(後置修飾)と、補語になる使い方がある。なお、名詞修飾の形容詞句は(　)で表示する。

3.1 名詞修飾の用法 … この用法で使えるかどうかは、名詞を辞書で調べてチェックする。辞書には to do を続けて使える、などと表示されており、修飾できる名詞はほぼ決まっている。日本語に訳して修飾を確認すること。

Health authorities have to take action /(to slow the prevalence of obesity). → action を後置修飾

adj/v　　o

「健康当局は行動を起こさなくてはならない/**(肥満の広がりを遅くする)**」

「健康当局は**(肥満の広がりを遅くする)**行動を起こさなくてはならない」← 日本語の修飾句は必ず前置

4.0 副詞(的)用法

動詞と副詞の機能を兼ね備える。副詞の意味から、①目的、②理由・原因、③判断の根拠、④結果、⑤形容詞修飾の５種類の用法に分類できる。⑤には２パターンある。結果用法以外は、日本語に訳した時に、to 不定詞が動詞(述部)か形容詞を修飾する。副詞句は〈　〉で表示する。

4.1 目的 … 「～するために」と訳す。目的であることを明確にするために、in order や so as をつけることがある。

Use mosquito repellent /〈to prevent infection〉. → use を修飾

adv/v　　o

「防蚊剤を使いなさい/**〈感染を避けるために〉**」

「**〈感染を避けるために〉**防蚊剤を使いなさい」← 日本語の修飾句は必ず前置

資料２-１「準動詞を品詞と機能の観点からとらえる」A4ハンドアウトの上半分

準動詞（不定詞[to 不定詞・原形不定詞]、動名詞、分詞）を品詞と機能の観点からとらえる（ver. 1.5）　Adv Commu ⑤

１．文法上の観点からの分類

①-1 to 不定詞（to infinitive）

A. 名詞用法 … 動詞と名詞両方の機能を持つ ⇒ 主語[S]、補語[C]、目的語[O](特定の動詞のみ)になる。主語は主に真主語で使う。
疑問詞(wh-to V)に続く場合は完全に名詞化するので、前置詞の目的語[前 O]でも使える。

B. 形容詞用法 … 動詞と形容詞両方の機能を持つ ⇒ 後ろから前の名詞を修飾する[限定・後置]、補語[C]になる[叙述]。

C. 副詞用法 … 動詞と副詞両方の機能を持つ ⇒ 動詞、形容詞、副詞、(述部・文全体)を修飾する。

①-2 原形不定詞（Bare infinitive）単に、「原形」とも言う

A. 名詞用法 … help の目的語[O]として使う(*to* 不定詞の *to* が省略された例外的な形)。

B. 形容詞用法 … 使役・知覚動詞と help の SVOC の補語[C](help は *to* 不定詞の *to* が省略された例外的な形)で使う。

②動名詞（Gerunds）

動詞と名詞の両方の機能を持つ ⇒ 主語[S]、補語[C]、目的語[O]、前置詞の目的語[前 O]になる。*to* 不定詞の名詞用法と共通点が多いが、より名詞に近い。目的語として使う場合、特定の動詞のみで使う。

③分詞（Participles）

A. 現在分詞 … 動詞(進行的・状態)と形容詞の両方の機能を持つ ⇒ 名詞を修飾する[限定・前後置]か、補語[C]になる[叙述]。

B. 過去分詞 … 動詞(完了・受動的)と形容詞の両方の機能を持つ ⇒ 前から名詞を修飾する場合、完了の意味になり[限定・前置]、後ろから名詞を修飾する場合、受動的な意味になる[限定・後置]。または、補語[C]になる[叙述]。

C. 分詞構文 … 現在分詞、過去分詞によって構成される句が、理由・時・付帯状況等を補足的に表す副詞句として機能する。

※1 名詞を修飾する(説明する)形容詞の用法を「限定用法」といい、補語になる用法を「叙述用法」という。このハンドアウトでは、それぞれ、「限定」「叙述」で表示している。

※2「動詞の機能を持つ」とは、準動詞の後ろはその動詞の使い方をするということ。例えば、OやCや副詞(句)が来るということ。

資料２-２「準動詞を品詞と機能の観点からとらえる」A4ハンドアウトの下半分「準動詞機能分類一覧表」

※レポート課題はこの表を参照しながら、品詞と機能からの切り口で作成する。

つまり、

①準動詞の名詞機能

②準動詞の形容詞機能

③準動詞の副詞機能

の順番で書いていく。例文はコピペではなく、自作の英文を書くように指示し、英作文の練習も兼ねるようにした。

２．準動詞機能分類一覧表［準動詞これだけの表］

		①不　定　詞 (Infinitives)					②動名詞 (Ger-unds)	③分　　詞 (Participles)	
		①-1 *to* 不定詞			①-2 原形不定詞				
		A.名詞用法	B.形容詞用法	C.副詞用法	A.名詞用法	B.形容詞用法		A.現在分詞	B.過去分詞
品詞	動&名	●			●		●		
	動&形		●			●		●	●
	動&副			●				●	●
機能	**S**	●					●		
	C	●	●［**叙述**］SV**C**, SVO**C**			[5] 使役・知覚・*help* の SVO**C**	●	●［**叙述**］SV**C**, [7] SVO**C**	
	O	[1]◎			[4] *help* の O		[6]◎		
	前 O	[2]▲*wh-to V*					●		
	形		●［**限定・後**］					●［**限定・前後**］	
	副			[3]●［5 種］				[8]●分詞構文・付帯状況	
補足説明		1. O で使う時は V が限られる（⇒7), consider 等、**疑問詞+to 不定詞**なら O 使えるで動詞がある。 2. ▲**疑問詞＋*to* 不定詞**は完全に名詞句化するので、前置詞の目的語も OK。 3. 副詞用法の５種 ①目的 ②理由・原因 ③判断の根拠 ④結果 ⑤形容詞修飾			4. *help* ***V(原)***, *help* ***to V*** の両方あり。 5. *help O* ***V(原)***, *help O* ***to V*** の両方あり。使役の *get* は *to V* を取る *get O* ***to V***。使役・知覚は、受動態にすると原形が to 不定詞になる。		6. O で使う時は V が限られる（⇒1）	7. 知覚動詞の C になり、使役動詞 have, get の C になる。使役 make の C は過去分詞のみ 8. 分詞構文は副詞句になる。また、with を用いて付帯状況を表し、C の位置で使う。with O **C**	
その他用法及び文法的機能		上記の他に *be to* 不定詞の形式ばった言い方があり、①予定 ②運命 ③義務・命令 ④可能 ⑤意思、の５つの意味がある。			原形不定詞は他に下記で使われる。 ①助動詞とともに用いる(do を含む) ②命令文で用いる ③仮定法現在で用いる		形容詞的に直後の名詞を修飾する使い方あり	**助動詞 *be*** と進行形を作る	①**助動詞 *be*** と受動態を作る ②**助動詞 *have*** と完了形を作る

※**[限定・後]**とは、名詞の後ろについて前の名詞を修飾。**[限定・前後]**とは、名詞の前後どちらにもについて名詞を修飾できるということ。

4. 165回例会(2021/11)で提示した課題への本研究発表の対応

- 準動詞理解のための前段として文法の講義を授業に組み込む。項目は、「品詞」「句と節」「５文型」「受動態」。その後に「不定詞」「動名詞」「分詞(分詞構文含む)」「準動詞のまとめ」の授業を行う。➡ 今回実施済み。
- 質問紙調査の項目を増やす。授業開始時の各文法項目の理解度を尋ねる質問を組み込む。➡ 今回果たせず。授業時間内(50分)で調査を実施したため。
- 質問紙の回収率と有効回答率を高める。➡ 前者は果たせた。後者は人為的に不可能。
- 授業内のクイズ、ミニテストや、定期試験で、理解度の向上と知識の定着を図る。➡ 授業内クイズを実施した。オンラインだったため定期試験の代わりにレポートを課した。
- 他大学で後期末に同様の質問紙調査を実施する予定なので、その結果を可能な範囲で今回の調査結果と比較する。➡ 発表時間の関係で、比較は割愛。
- 『準動詞の品詞と機能一覧表』を更に良いものへ改訂する。➡ 行った。
- 来年度の英米文化学会の大会または例会で再度、同テーマで研究発表する。➡ 今大会にて発表。

5. 質問紙調査の実施

質問紙調査の実施要領と有効回答率

① 昨年担当した標準的な英語レベルの理系大学２年生に対して調査を実施した。オンライン授業のため、定期試験は実施されなかった。

② 質問紙はGoogle Formで作成し、後期の15回目授業の終わりの10分程度を使い実施した。

③ 質問紙は11個の選択回答式で構成した。最後の質問のみ複数回答可とした。

④ 対象者**125名**中、**120名**から回答を得た(回収率**96.0%**)。その内、25名から研究使用を望まない意思表示があったので、有効回答数は**95**、有効回答率は**79.2%**であった。

➡ 5名はオンライン授業欠席者と思われるので、実質的な回収率は100％とも言える。

➡ Google Formを使用したので、研究使用の可否を尋ねる質問を１番最初に置いた。そのため研究使用を望まない学生数が多くなってしまったのかもしれないが、理由は不明。

6. 質問紙調査の結果 (1)

Q1. to不定詞の３用法に関する理解が深まりましたか。（n=95）

	人数	割合	人数	割合
① 大いに理解が深まった。	25人	26.3%	**86人**	**90.5%**
② 少し理解が深まった。	61人	64.2%		
③ もともと理解出来ている状態に変わりはない。	6人	6.3%	↑	
④ もともと理解出来ていない状態に変わりはない。	0人	0.0%	９割以上理解深まる	
⑤ 分からない	2人	2.1%		
無回答	1人	1.1%		
計	95人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (2)

Q2. 動名詞の使い方に関する理解が深まりましたか。（n=95）

	人数	割合	人数	割合
① 大いに理解が深まった。	23人	24.2%	**89人**	**93.7%**
② 少し理解が深まった。	66人	69.5%		
③ もともと理解出来ている状態に変わりはない。	5人	5.3%	↑	
④ もともと理解出来ていない状態に変わりはない。	0人	0.0%	９割以上理解深まる	
⑤ 分からない	1人	1.1%		
計	95人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (3)

Q3. 分詞（現在分詞・過去分詞）の使い方に関する理解が深まりましたか。（n=95）

	人数	割合	人数	割合
① 大いに理解が深まった。	25人	26.3%	**86人**	**90.5%**
② 少し理解が深まった。	61人	64.2%		
③ もともと理解出来ている状態に変わりはない。	5人	5.3%	↑	
④ もともと理解出来ていない状態に変わりはない。	1人	1.1%	９割以上理解深まる	
⑤ 分からない	3人	3.2%		
計	95人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (4)

Q4. 動名詞と現在分詞の区別が出来るようになりましたか。（n=95）

	人数	割合	人数	割合
① かなり区別が出来るようになった。	18人	18.9%	**82人**	**86.3%**
② 以前より区別が出来るようになった。	64人	67.4%		
③ もともと区別出来ている状態に変わりはない。	10人	10.5%	↑	
④ もともと区別出来ていない状態に変わりはない。	1人	1.1%	８割以上出来るようになる	
⑤ 分からない。	2人	2.1%		
計	95人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (5)

Q5. 動詞の過去形と過去分詞形の区別が出来るようになりましたか。（n=95）

	人数	割合	人数	割合
① かなり区別が出来るようになった。	17人	17.9%	**82人**	**86.3%**
② 以前より区別が出来るようになった。	65人	68.4%		
③ もともと区別出来ている状態に変わりはない。	11人	11.6%	↑	
④ もともと区別出来ていない状態に変わりはない。	1人	1.1%	８割以上出来るようになる	
⑤ 分からない。	1人	1.1%		
計	95人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (6)

Q6. 準動詞を相互に比較することで主要四品詞（動詞、名詞、形容詞、副詞）の理解が深まりましたか。（n=95）

	人数	割合	人数	割合
① 大いに理解が深まった。	25人	26.3%	**87人**	**91.6%**
② 少し理解が深まった。	62人	65.3%		
③ もともと理解出来ている状態に変わりはない。	6人	6.3%	↑	
④ もともと理解出来ていない状態に変わりはない。	0人	0.0%	９割以上理解深まる	
⑤ 分からない	2人	2.1%		
計	95人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (7)

Q7. 準動詞を相互に比較することで５つの文型の理解が深まりましたか。（n=95）

	人数	割合	人数	割合
① 大いに理解が深まった。	24人	25.3%	**83人**	**87.4%**
② 少し理解が深まった。	59人	62.1%		
③ もともと理解出来ている状態に変わりはない。	7人	7.4%	↑	
④ もともと理解出来ていない状態に変わりはない。	3人	3.2%	９割弱理解深まる	
⑤ 分からない	2人	2.1%		
計	95人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (8)

Q8. ハンドアウト『準動詞の品詞と機能一覧表』が準動詞の全体像を理解するために役立ちましたか。
（n=95）

	人数	割合	人数	割合
① 大いに役立った。	48人	50.5%	**91人**	**95.8%**
② 少し役に立った。	43人	45.3%		
③ あまり役に立たなかった。	3人	3.2%	↑	
④ 全く役に立たなかった。	0人	0.0%	９割以上役立つ	
⑤ 分からない。	0人	0.0%		
無回答	1人	1.1%		
計	95人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (9)

Q9. 準動詞を相互に比較することで各準動詞の理解が深まりましたか。（n=95）

	人数	割合	人数	割合
① 大いに理解が深まった。	25人	26.3%	**85人**	**89.5%**
② 少し理解が深まった。	60人	63.2%		
③ もともと理解出来ている状態に変わりはない。	6人	6.3%	***Q10*へ⤴**	↑
④ もともと理解出来ていない状態に変わりはない。	1人	1.1%		およそ９割理解深まる
⑤ 分からない	3人	3.2%		
計	95人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (10)

Q10. [Q9で①②を選択した理解が深まった**85人**が対象] 準動詞への理解が深まることで、英語・英語学習に対する意識や、英語学習自体に何か変化がありましたか。プラス面だけでなく、マイナス面と考えられることを含めて回答して下さい。（n=85）

	人数	割合	人数	割合
① かなりあった。	9人	10.6%	**56人**	**65.9%**
② 少しあった。	47人	55.3%		
③ 得意、好きな意識に変化はない。	15人	17.6%	***Q11*へ⤴**	↑ 変化あり
④ 苦手、嫌いな意識に変化はない。	5人	5.9%		
⑤ 分からない。	9人	10.6%		
計	85人	100.0%		

6. 質問紙調査の結果 (11)

Q11. [Q10で変化があったと回答した**56人**が対象] それはどのような変化ですか。（複数回答可）

	回答数	回答数割合 (n=119)	対象者数割合 **(n=56)**	有効回答割合 **(n=95)**
① 英文が理解しやすく（＝読みやすく）なった	25	(21.0%)	44.6%	26.3%
② 英文の構造がよく分かるようになった	39	(32.8%)	69.6%	41.1%
③ 英文を正確に読めるようになった	5	(4.2%)	8.9%	5.3%
④ 英文を早く読めるようになった	1	(0.8%)	1.8%	1.1%
⑤ 品詞や文型を考えるようになった	28	(23.5%)	50.0%	29.5%
⑥ 英文が理解しにくく（＝読みにくく）なった	0	(0.0%)	0.0%	0.0%
⑦ 英文を読むのが遅くなった	1	(0.8%)	1.8%	1.1%
⑧ 日本語に訳して読むようになった	2	(1.7%)	3.6%	2.1%
⑨ 英語の基本文法事項を理解・習得していないことが分かった	8	(6.7%)	14.3%	8.4%
⑩ 辞書で動詞を調べるようになった	5	(4.2%)	8.9%	5.3%
⑪ 文法書などを参照するようになった（ネット検索を含む）	5	(4.2%)	8.9%	5.3%
計	119	(100.0%)		

7. 質問紙調査の結果に関する考察 (1)

結果に関する考察

- 標準レベルの大学生であっても殆どの学生は準動詞を理解出来ていない。理解出来ていると自信を持って言える学生は全体の**5～6%程度**に過ぎない。学校英語教育に大きな問題があるとみるべきではないか。
- 授業実施の結果、学生の各準動詞の理解は程度の差こそあれ、**9割以上**深まった。
- 準動詞を相互に比較することで、学生の５文型への理解、四大品詞と５文型への理解と各準動詞への理解は**9割前後**深まった。また、ハンドアウトの「準動詞機能分類一覧表」は準動詞の理解促進に役立った。
- 各準動詞の理解が深まった**89.5%(85/95)**の学生の内、**58.9%(56/95)**に意識変化が生じた。これは全回答者の **46.7%(56/120)**、つまり**約半数近く**に相当した。
- 意識変化のあった56名の意識の変化内容に否定的なものはほぼなかった。

結論：準動詞に焦点を当て、準動詞を比較対照する学習(=教授)方法には、学生が英文をより良く理解するための学習効果や、英語学習習慣の良い方向への変化があると考えられる。

7. 質問紙調査の結果に関する考察 (2)

準動詞の理解が学生の英語学習に与える教育的意義

- 教育的意義以前の問題として、調査から判明した通り、準動詞を十分に理解していない学生が圧倒的多数である以上、大学の英語教育で準動詞を再指導することがまず必要と思われる。
- 英文構造がよく分かるようになった、英文を理解しやすくなった、品詞や文型を考えるようになった、という肯定的変化が多数見られたことから、準動詞と準動詞に関連する基本の文法分野について再指導をすることは、学生の英語学習に肯定的に作用する。また、特定の英文法分野の範囲が相互に密接に関連するという観点から、英文法の効果的な指導が可能になる。
- 学生自身が、英語の基本文法事項を習得していないという気づきにつながる。

  ➡ 自覚は持っているかもしれないが、どこから手をつければ良いのか分からない学生が多いのではないか。品詞や文型の基本ルールが英文理解の鍵になることが分かる。
- 学生が、辞書(電子辞書、webの辞書)や英文法書を参照するようになる。

  ➡ 最近の学生は、辞書を引かず、文法書を参照しない傾向にあると感じているので、意義のあることである。特に、基本動詞は、辞書を何度も引いて語法・文型を確認しないと使えるようにならない。最近の学生は、辞書を使っても意味しか確認しない悪しき傾向にある。

8. 今後の研究に向けて

今後の課題：準動詞に焦点を当てる学習活動により、半数弱の学生の英文理解に肯定的な意識変化が見られた。今後は、数値化できるテストを通して、学生の準動詞、品詞、文型の理解度上昇を客観的に測定したい。

- オンライン授業での調査であったため、定期テストを実施することによって学生の理解度を確認することが出来なかった。理想的には、授業開始時と最後の授業で同じテストを実施し、理解度の上昇を証明できると良い。
- 質問紙調査は、主観による回答であるため、意識変化のいつくかに関しては、試験等でのデータ化とデータによる裏付けが必要。
- 授業と教材をもっと工夫し、「大いに理解が深まった」の回答割合を増やすことが必要。「少し理解が深まった」では、十分な理解から程遠い可能性がある。
- 毎回の授業の終わりのクイズで、準動詞の理解度を確認したが、まだまだ理想からは程遠いと感じた。クイズ形式の問題をたくさん解くことも理解の定着に必要であると思われる。
- 文系学部の学生、違う英語レベルの学生を対象に調査すると、新たな発見があるかもしれない。今後、機会があれば実施したい。

参照文献

西原俊明, 西原真弓, Pino Cutrone (2019). 『Good Health, Better Life 健康的な生活から学ぶ大学総合英語』 東京：金星堂

薬袋善郎 (2000). 『英語リーディング教本』(p. 69) 東京：研究社

参考文献

佐伯智義 (1997). 『英語の科学的学習法―文法的分析でマスターする』 東京：講談社